

お染の嘆き

野村胡堂

—

「八、あの巡礼を跟けてみな」

平次は顎あごをしゃくつて見せました。が、浅草橋の御見附を越して、浜町の方へトボトボと辿たどつて行く男巡礼、頽然たいぜんとした六十恰好かっこうの老翁ろうやに、何の不思議があろうとも、ガラツ八の八五郎には思えなかつたのです。

「あの、拙ますい御詠歌ごえいをやつて歩く——」

「そうだよ」

八五郎はそれ以上の問答を重ねませんでした。主人の命令を受けた獵犬のような素早さで、老巡礼の後をヒタヒタと跟けて行つたのです。

老巡礼は口の中で何やらブツブツ呟つぶやきながら、一軒一軒の戸口に立って、恐へたしく下手な御詠歌を歌って歩きました。何処でも相手にしてくれそうな様子はありませぬ。

何軒目か——小意気なしもたやの前へ来ると、格子が開いて、盆の上へ小錢ひねを捻ひねったのが一つ、四十恰好ほうしやの女が差出しました。

老巡礼の御詠歌は、その報謝ほうしやとは関係なく、しばらくは続きましたが、歌が終ると、

「——お染やあい」

さまで、高くはありませぬが、身に沁みるような悲痛な声が、老巡礼の唇を衝ついて出たのです。

主人あるじの女はしばらく躊躇ためらいましたが、やがて思い切った様子で、

「お前さん、どうしたというんだい。お染さんとかを、尋たずねてでもいなさるの

かい」

老巡礼の踵きびすを返した後姿に声をかけたのです。

「ハイハイ、左様でございますよ、お神さん、——取って十九、左の眼が見えない、お染という娘を御存じじゃございませんか」

「お染さんというのは、一人二人知ってるけれど、左の眼が悪いのは知らないねえ」

「どなたも左様仰しゃいます。——やはりこの世では縁がないのでございましょう。——そう思つて諦あきらめようとは思いますが、浅ましいことには諦め切れません」

老巡礼は声もない鳴咽おえつに、皺しわだらけな頬を引吊らせながら、ポロポロと涙をこぼしているのです。

「まア、お気の毒な」

女主人は思わず鼻を詰つまらせましたが、それ以上に立入ったところで、何うにもならないと思い返した様子で、トボトボと遠ざかり行く、老巡礼の後姿を見送るばかりでした。

「親分」

八五郎は路地の外にいる平次の姿を見つけると、老巡礼から目を離して、その側に寄ります。

「シッ、——もう少しあの巡礼の後を跟つけるんだ。俺は外に仕事がある」

「いやな術てじゃありませんか、親分、引くっ括くって二三百引ぞくっ叩たたいてやりましようか」

ガラツ八の八五郎は、巡礼の愁嘆しゆうたんを、物貰いの念入りな術てだと思つたのでしよう。

「馬鹿なことをしちやならねえ、——あれを見るがいい」

平次の指した方を見ると、十七八の綺麗な娘が一人、老巡礼の後を追って、何処までも見え隠れに跟けて居るのです。



「へエ、——筋がありそうですね、親分」

「てめえ手前はあの娘を知らないのか」

「この辺の者じゃありませんよ」

「この辺の者で、あれほどのきりようなら、八五郎が知らない筈はないだろう」

「まア、そう言ったようなもので——」

「いやな野郎だな——とにかく、あの親爺おやしが宿屋とやにつくまで、後を跟けて見ることがいい。飛んだ草臥くたびれ儲けかも知れないが」

平次はそれっ切り、老巡礼も、娘も見捨ててしまいました。八五郎に言いつけて置けば、地獄の底までも、執念しゅうねん深く跟けて行くことが解っているのです。

この巷ちまたの一些さじ事が銭形平次の勘かんを裏切らずに、翌々日は思いも寄らぬ大事件になつて現れました。

「親分、——来ましたぜ、あの娘が？」

「到頭」

ガラッ八の八五郎が、あわてて注進して来るのを、平次は妙に予期したような心持で待ち構えていたのです。一昨日おととい老巡礼を跟つけた娘の顔には、不思議な疑惑の色がありありと見えたばかりでなく、平次の方に記憶がなくとも、娘の方では平次をよく知つて居る様子だったのです。

「親分が焼け出されたとは知らずに、元の家のあたりをウロウロして居るのを、いい塩梅に拾つて来ましたよ」

「何処どこにいるんだ」

「外とちですよ」

「早く伴れて来な。うっかりすると、鳥は飛ぶぞ」

「へエ——」

ガラッ八は外へ飛出しましたが、路地を二三度出たり入ったりしたと思うと、

「親分、た、大変ッ」

格子の外から脳天のうてんに抜けそうな声を出します。

「何をあわてるんだ。——娘の姿が見えなくなつたらう」

「それほど知っているなら、親分」

「だから、鳥が飛ぶぞ——と言つたじゃないか。十七や十八の娘が岡っ引の家へ来るのはよくよくだ。思詰めてここまで辿たどりついても、いざとなると怖くなつて逃出したんだろう」

平次は思いのほか泰然たいぜんとしておどろく様子もありません。

「落着いて居ちやいけませんよ、親分。——親の敵を討ちたい——つて言つたよ

うだから」

「親の敵？」

「誰も相手にしてくれないが、銭形の親分なら、きつと筋道を立てて下さるに
違いない——とも言いましたぜ」

「たいそう頼られたようだが、それにしちや逃げるのは変だぜ」

「どうしたものでしょう、親分」

「相手が若くて綺麗な娘だと、意気込みまで違って来るぜ」

「そんなわけじゃねえが——」

「所、名前を訊かなかったのか」

「親分に逢ったら、申し上げます——てやがる」

八五郎は少しむくれて見せました。

「いずれまた思い直して来るだろう、二三日待つて見るがいい」

「そんな暢気のんきなことを言っているうちに、敵役は逃げてしましますよ。何とかあの娘の家を突止める工夫はありませんか」

「たった一つある。——手前てまえ、この間の巡礼の宿を見究みきわめて来たろうな」

「谷中の笠守様の手前、木賃宿へ入ったところまで突止めましたよ」

「よし、それが判りや手繰たぐれるだろう。行ってみようか」

銭形平次とガラツ八は、昼下りの町を真っ直すぐに飛びました。

谷中の木賃宿で、老巡礼を捉つかまえたのは、それから半刻ほど後。

「何も怖こわがることはない。少しわけがあつて、お前の身の上話が訊きたいのだよ。——お染とかいう娘のことから話してみるがいい」

平次は穏かな調子で切出しました。この辺は三輪みのわの万七の縄張りで、番所へつれて行くとうるさいと思つたのでしよう。真昼の木賃宿のガラ明きなのを幸い、裏の小部屋を一つ借りて、おどおどする老巡礼に相對したのです。

「皆んな申上げます。親分さん、——私ほど因果いんがなものはありません」

老巡礼の話は最初から涙で濡れました。その筋を掻いつまんで言う——。

老爺おやしの名は百松まつ、生れは川越在、今でもそこには、親類預けになったままの家も屋敷も、田も畑もあるので、東国西国の霊場を廻って七年目でようやく江戸までたどり着いたというのです。

「娘のお染が二つの時先妻に死に別れ、後添のちぞいのお楽という女房貰いました。これは、才覚も容貌きりようも十人並に優れていながら、まことに心掛の悪い女で、自分の腹に生れたお七という娘可愛さに、継娘ままこのお染を、隣土地の悪者で、贓品けいずかい買を片手間にしている音次郎という者に十両の金をつけてやり、私の前や世間体を、神隠しに逢ったということにしていたのでございます」

「——」

「当座は嘆なげきも悲しみもしましたが、私もまだ老く朽ちた年でもなく、二番目

娘のお七の成長を見ているうちに、お染のことを忘れるともなく年が経ちましたが、七年前、お七が疱瘡ほうそうで死んでからは、私の心持は、また、三つの歳行方不明になったお染のことで一パイになり、その日その日の仕事にも身が入らない有様になりました」

「——」

「その頃は女房のお楽も心が挫くじけ、その上巫女いちこの口寄せで、お染の生霊たの祟りたで、お七が死んだと聞いては身も世もございません。洩しる私ぢを無理に口説くどき落おして、十年前に長崎へ行ったという音次郎を尋ねながら、罪亡ぼしかたがた、西国巡礼の旅に出たのでございます。

娘お染を捜しながら、贖罪しよくざいの旅は、それから七年の間続きました。音次郎は相変らず、贓品ぬげにや拔荷ぬげにを扱あつて、大阪から長崎へ、江戸へと移った後を尋ねて、骨しにも沁しむような艱難げんなんが、去年の暮、江戸へ入る一足手前の、神奈川の安宿で、

お染の命を奪つてしまつたのです。

一 たんの過あやまちから、継ままこ娘を音次郎に始末させたお染は、それから是一日一刻も安らかな心持はございませんでした。私と二人、拙ますい御詠歌を歌いながら、人様の門口に立つては、ツイお染やあい——と言つたのでございませす。お染を捜し当てるまでは、地獄の底までも旅をつづける心算つもりでございませしたが、何分の艱難に身体を痛めた上、風邪を引いたのが因もとで、——お染、堪忍してくれ、濟まないと、濟まないと、言いつづけながら死んでしまひました」

老巡礼百松の話は、哀れ深く続きます。

三

「その娘の行方が、近頃になつて判つたというのだろう」

平次は百松の話のスピードを促す^{うなが}ように、少しばかり先を潜^{くぐ}りました。

「音次郎が江戸で古道具屋をしているということが判つて、飛んで参りました。谷中の八軒町で、手広くやっている川越屋、——あれが昔の音次郎でございます。七年目で捜し当てた嬉しさ、いきなり飛込んで店先で怒鳴り立てると、お前の娘などを知るものか、死んだ女房が夢でも見たんだらう——と剣もほろろの挨拶、二度目には私を突飛ばして下水の中に抛^{ほう}り込み、もう一度来やがったら、言い掛りを申立てて、見廻りのお役人に引渡すところという無法なことを申します」

「その音次郎のところに、娘があつた筈だが、あれは誘拐^{かどわか}されたお前の娘とは違^{ちが}うのかい」

平次はちよつかいを掛けて見ました。

「町内で評判者の娘でございますが、あれはまるつきり違います。私の娘のお

染は取つて十九になる筈ですが、音次郎の娘はまだ十七位で、それに、お染は綺麗な娘でございましたが、可哀想に左の眼は、生れながら白い霽もやがかかつておりました。音次郎の娘は両方の眼が綺麗で、名前もお崎とかいうそうで——」

「それで諦らめたというのか——」

「諦らめるようなそんな生優なまやさしいことではございません。十七年前に女房のお染が、十両の金をつけて始末を頼んだお染、音次郎が知らない筈はありません。死んだか、生きているか、売られたか、人にやったか、それを白状させるまでは毎日でも参ります。今日もこれから川越屋へ行くところでございますよ」

百松の一徹てつな顔には、炎のような熱心が、メラメラと燃えるようにさえ思えるのです。

「ちょうどいい塩梅だ。一緒に行ってみよう」

「親分さんも」

「そうだよ。音次郎だって、木や石じゃあるめえ。この俺からも口を添えて、娘のありかを訊いてやろう」

「有難うございます。それでは親分さん」

平次とガラツ八は、百松を先に立てて、其処からはほんの一丁場の八軒町に向いました。

が、平次もガラツ八も、あまり、神経の鋭くないらしい百松も、八軒町に入つて、次第に不思議な空気を感じました。

「おや？ 変じゃないか、八」

「川越屋には忌中きぢゆうの札が出てますよ、親分」

「――」

百松は何にも言わずに、ゴクリと固唾かたずを吞みます。

店は半分鎖とぎしたまま、ガラクタ物の古道具が少々、その奥の方には、それで

も二三人の男女が、若い娘を囲んで、しめやかに話している様子でした。

「取込みのところを気の毒だが、主人あるじの音次郎が居るだろうか」

平次はその中へ、横柄らしい顔もせずに入って行きました。

「あ、銭形の親分、——主人は亡くなりましたよ」

立って来たのは、町内の庵室おこなに行い済している蓼齋居士りょうさいこじという、発句ほっくも詠めよば、経も読むといった法体ほったいの中年男でした。

「えッ、音次郎が死んだ？」

一番驚いたのは老巡礼の百松です。

「おとつい昨日の晩、娘のお崎さんの留守中に、頸くびを縊くくって死にましたよ」

蓼齋りょうさいの後ろから顔を出したのは、下谷一番と言われた万両分限ぶげんの主人、佐野

屋正兵衛の分別顔でした。

「お前さんは、佐野屋さん？」

「この谷中の奥に小さい寮りょうがあるので、店の前を通る毎に、古道具を冷かしたりして、川越屋とは懇意になりましたよ」

佐野屋正兵衛は弁解ともなく、こんなことを言うのです。

その間、娘のお崎は黙って首をうな垂れて居りました。二度まで平次やガラツ八に顔を合せたのを、ここでは言つて貰いたくなかつたのでしよう。

近所の衆らしい女達も、コソコソと帰りました。つづいて蓼齋りょうさいと正兵衛も、用事を拵えて立ち上がります。残つたのは、店で使っている十五六の小僧が一人と、あとは娘のお崎だけ。

「お崎さんとか言つたね。——お前と顔を合せるのも、これで三度目だ。混み入つた話がありそうだが——」

平次はしずかに煙草入を抜きます。八五郎はその間に気をきかせて、老巡礼の百松と小僧の栄吉を外に連れ出します。

「四度目ですよ、親分さん」

「はて？」

「一月ばかり前、近所の寺方へ押込おしこみが入ったとやらで、三輪の親分さんと一緒にお出でになりました」

お崎は思いの外ハキハキして居ります。そう言われると何処かで見たとあるような、——美しいと言うよりは、愛くるしい、聰明そうめいそうな顔立ちが人を牽ひき付けます。

「そんなこともあったね」

しばらく江戸中の神社仏閣を荒し廻って、古文書、古写経こしやきよう、古版の経文から、本尊の仏体仏具まで手当り次第に盗み歩いた不思議な怪盗の詮索せんさくに、谷中の寺町まで来たことのあるのを、平次も思い出したのです。

「ところで、いろいろ聴きたいことがあるが、父親の死んだことについて、何

か腑ふに落ちないことでもあるのかい。——八五郎に、親の敵を討ちたいと言つたそうだが」

平次は静かな調子で、お崎の話を引き出しにかかりました。

「あんなに機嫌のいい父とうさんが、死ぬ気になる筈はありません。それに」
「——？」

「私には不思議なことばかりでした」

「最初から順序を立てて話して貰おうか」

処女おとめの感傷を整理して、平次はお崎の話に筋道をつけて行くのでした。

それに依ると、——老巡礼百松が、変な掛け合いに来るのは、お崎もかなり神経を痛めた様子で、その誘拐かどわかされた娘のお染とやらのことを、もういちど詳しく訊く心算つもりで、一昨日思い切って老巡礼の後を跟け、話しかける折もなく、柳橋を渡って両国まで出てしまったというのです。

氣のついた時はもう夕暮、女の足では明るいうちに帰れそうもなかったので、柳橋の知合のうちを訪ねて、晩飯の世話になり、そのの隠居と小僧に送られて、谷中の自分の家へ帰って見ると、父親の音次郎は、店先の三十貫もあろうと思ふ仏像に縄をかけ、その一端を長押ながげしの上から、居間に通して、その縄の端くびつこで頸くびを吊つつて死んでいたので。

お崎の驚きは言う迄もありません。大声で近所の人を呼び集め、父の死骸を長押ながげしからおろしましたが、身体にまだ温か味が残っているくせに、もう息を吹き返させる術すべもなかったのです。

騒ぎの中へ小僧の栄吉は帰って来ました。一刻ばかり前、急ぎの用事で本郷まで使つかいに出されましたが、門口を出るとき、始終店へ遊びに来る蓼齋りょうさいに逢ったので、安心して出かけたと言うのです。

町内の人達も駆けつけ、翌日は変死人としての検屍けんしも済ませましたが、生前

人附合いの悪かった音次郎には、友達も親類もなく、わずかに下谷の万両分限佐野屋正兵衛が、親身になつて世話をしてくれ、やがて、孤児みなしこになつたお崎も、
一七日が済んだら、店を畳んで引取ろうと言ひ出ししてくれました。

形ばかりの葬式を済ましたのは昨日きのう、何もかもこれでおしまいになつて行くのを見ると、お崎は胸に畳んだ大きな疑問のやり場もなく、そつと脱け出して、評判の銭形平次に訴えようとしたのですが、御検屍まで済んだのを、荒立てて世間を騒がすでもあるまい——といった、処女おとめらしい弱氣さへに誘われて、平次の家の格子戸の前から、追われるように帰つて来たのは、ツイ今しがたであつた——とこう言うのでした。

「父親の死んだのが、尋常でないと何うして解つたのだ」
平次は尋ねました。

「言つても構わないでしょうか、親分」

「構わないとも、——俺の胸一つに畳んで置いて、滅多にお前に迷惑のかかるようにはしない心算だ」

「頸くびを縊くくるのに、長押なげしの上へ縄を通して、その先へ仏様を縛ったのは変じゃありませんか。仏様は台座だいざから落ちて、床ゆかに転げて居ましたが——」

お崎の眼は、涙に濡れながらもピチピチした知恵に輝きます。

「縄は輪にして、頸へ引っかけてあったのだね」

「いえ、頸の後ろで堅く縛ってありました」

「すると踏台ふみだいは？」

「何んにもありません」

「すると、縄にブラ下って、宙で自分の頸を縛ったことになるが——」

平次の頭脳はもう、この事件から『不合理』を嗅ぎ出したのです。

「お役人様方も、佐野屋の旦那も、お父さんは頸を縄で縛ったまま、店のお仏

像を台座から突き落とし、自分の身体が重いお仏像に吊られて、足が浮いたのだと仰しゃいました」

「成程」

「でも——」

お崎の処女らしい、鋭い叡知えいちが、何処が怪しいということもなく、この仮説かせつに反対して居るのでした。

平次は立ち上がって、いろいろ調べて見ました。居間の中には、案外道具らしいものはなく、長火鉢はありますが、それは反対の隅の方で、踏台の代りにはならず、炭取や、箱膳はあつたにしても、これは踏台になるほどのものではありません。

勝手から真物ほんものの踏台を持って来て、暖簾のれんをかけた店口の上の長押を調べました。頸吊りの縄の跡は、僅かに埃りの上に印されただけ、ここを重点にして、

十六七貫の人間を、三十貫あまりの仏体が引摺り上げた様子もなかったのです。店へ行つて見ると、仏像はまだ台座から転げ落ちたまま、片隅に寄せられてありますが、恐ろしく頑固な青銅製で、多分露仏ろぶつに建立したものでしょう。少しの剥落はくらくも損傷もなく、この仏像を転がし落された不釣合に高い木製の蓮台にも、不思議なことに、大した傷も見付からなかったのです。

「成程、こいつは少し変だ。こんな手数のかかる頸の吊りようをする人間もあるまいが、こんな手数のかかる人殺しも始めてだ」

平次もさすがに唸うなられます。現場に駈け付けて、死骸を一目見ることが出来たら、何とか解決の鍵を掴むことも出来たでしょうが、何も彼かも済んでしまつた今となつては、どうすることも出来ません。音次郎の死骸は昨日のうちに、一切の手続が済んで葬ほうむつてしまつたのです。

四

「親分、——変なものがありますよ」

ガラッ八が店の隅から頓狂な声を出しました。

「何だ、八。騒々しいじゃないか」

「こいつは驚くぜ、親分。外から見えるように並べたのはガラクタだが、戸棚の奥や、台の下や、風呂敷の中にはピカピカしたものばかりだ」

「——」

「こいつは、お触れ書ふの廻がきった品ですよ、親分」

「何だと」

「俺あつしには何が何やら解らないが、経文だの、仏具だの、お仏様だの——いや、こ

いつは大変ッ」

あまりの騒ぎに、平次も飛んで行つて見ました。ガラッ八の面白そうに動く手に従つて引張り出されたのは、ことごとくお奉行所のお触れ書に載つた贓品ぞうひんばかり、この一二年の間、江戸中の寺々から盗み集めた宝物のうち、十の二つ三つは此処にあると言つても差支えはなかつたでしょう。

「成程こいつは大変だ。寺方の関係だから大急ぎで寺社のお係りへも届けてくれ。それから、お山同心にも申上げるんだ」

平次はもう、お崎の感傷になど係り合つては居られませんでした。

間もなく見廻り同心が出張して、川越屋かわごえやの家中を引っくり返して調べると、盗み溜めた寺方の宝物は、仏像仏具、経文あわ併せて八十幾点。床下と天井裏に隠した金銀は、ザツと二千三百両、あまりのことに、役人方も暫くは口もきけないほどの驚きです。

寺荒しの怪盗は、武州無宿の音次郎と判り、娘のお崎も幾度も幾度も取調べ

を受けましたが、これは兇悪無慙きょうあくむざんな曲者の娘らしくもなく、あまりに清純なのと、父親の悪事を毛ほども知らなかったので役人方を驚かしました。

この騒ぎが江戸中に拡がると、三輪の万七は、憤々ふんぶんとして駈け付け、平次に嫌味の数々を聞かせながら、必死となって探索を始めました。

「親分、とうとう三輪のが出しゃ張って巡礼の親爺おやしを縛ってしまいましたよ」
ガラッ八がそう言って来たのは、その翌々日でした。

「何？ あの百松を縛ったというのかえ」

「蓼齋りょうさいがあの晩、川越屋の裏のあたりをウロウロしている老爺を見たんだそうですよ」

「そんなこともあるだろうが——少し困ったことになったよ」

「何が困るんで、親分」

「俺は外のことを考えて居たんだ。あの老爺は人などを殺せる筈はないが——」

三つするとき誘拐かどわかされた娘を捜さがして、七年の間巡礼すると、どんな心持になるかな」

「とにかく、娘を誘拐したのは音次郎でしょう。娘を捜して七年ものあいだ苦労した人間だから、怨うらみもまた人一倍じゃありませんか」

「それも理窟りくつだが、——娘の行方ゆくえは、まだ判らないだろう。音次郎が死んでしまえば、その娘の行方は、この先も判る道理はない」

「成程ね」

「音次郎の口を塞ふさいだのは、あの百松じゃあるまいよ」

そんな話をしているところへ、飛脚屋ひきやくやから赤紙付の手紙を一通届けて来ました。

「手紙ですよ、親分」

「それを待っていたんだ」

平次は封を切るのももどかしそうに、ザツと手紙に眼を通します。

「親分」

後ろから覗く八五郎。

「八、——この通りだ。あの巡礼の百松は真物ほんものか偽物か、川越へ手紙をやつて調べて貰つたんだ。その返事は一々あの老爺おやじの言う通り、少しの食い違いもない。頸筋たんこぶの痰瘤たんこぶのことまで書いてある。これで俺の考えが決つたよ」

平次は手紙を畳み直して立ち上がりました。

「どう決つたんで——」

「あの老爺が、川越在の百姓百松に相違ないと解れば、今度はお崎の身の上を調べて見なきやならない。手前は、あの娘の顔を見覚えがあるとは思わないか」

「そう言えば何処かで見たとのことのある顔ですよ。ずっと遠い昔のようでもあり、ツイ二三日前のようでもあり、——ニツと笑靨えくぼの寄る所が」

「それじゃ、あの百松を何処かで見たことはないか——」

「そう言えば、あの小汚いこぎたな老爺じじいも何処かで見ましたよ。何かの弾みはずで、二三本しか残らない歯を出して笑う顔が——」

「ね」

「あッ、違えねえ。あの百松老爺じじいと、お崎の顔が、どこか似て居るんじゃないですか、親分」

「気が付いたか、八。若い娘と六十の爺さんだ。一寸見ちよつとみじゃ似たところもないが、何かの拍子に、二人の面差おもさしに似たところがある。それを俺も手前てめえも、遠い昔に逢った人のように考えて居たのだよ。——来い、八。面白いことを見せてやる」

平次は八五郎を引摺ひきずるように、川越屋へ飛んで行きました。

裏口から入ると、寒々とした居間に、お崎はたった一人、深々と物を考えて

居ります。父親が非業に死んだ上、その父親が寺荒しの一番冒瀆ぼうとく的な大泥坊と知れては、全く世間へ顔向けをする気力ありません。

「お崎さん、ちよつと昌平橋まで一緒に行つてくれ」

平次の飛込んだ姿を、

「――」

お崎は怨めうらしそうに見やるばかりです。

その気の進まないのを、どんなに骨を折つてつれ出したことでしょう。昌平

橋の角井憲庵けんあん——その頃蘭法らんぽうで聞えた名医のところへ、半ば権柄けんがらづくでつれ込

んだのは、その日の夕方でした。

「この娘の左の眼を見てやって下さい。——これは生れながらの丈夫な眼でしようか、——それとも」

平次のせき込んだ調子を、憲庵は大医らしい沈着さで眺めながら、静か

にてんがんきょう眼鏡を取って、お崎の眼をしんさつ診察し始めました。

「フォーム」

しばらく何やら考え込む憲庵。

「どうでしょう先生、この娘の眼が生れつき良いか悪いかで、大変なことになるんですが」

「生れつきの良い眼ではないな」

「しめたッ」

平次はすっかり興奮して、日頃にもないせつやかな顔を突出します。

「これは手を入れた眼だよ、銭形の、——決して生れつきの良い眼ではない。

が、待ってくれ、これほどのりょうじ療治をする名医は、江戸はおろ愚か、京にも大阪にもない筈だが——」

「長崎ですよ、先生ッ。十六七年前、長崎で療治したのですよ」

「十六七年前長崎で？——成程それで合点が行った、蘭法らんほうの療治を受けたのだらう。それならばよく解る。子供の時は、多分白い靄もやのかかった眼であつた筈だ」

「その通りですよ、先生。」

「一体、それがどうしたというのだ」

角井憲庵も何が何やら解りません。

「それが解れば、この娘の仕合せです。大泥坊の娘でないということ、角井憲庵先生が保証してくれたようなものですから」

「——」

二人の応対あはわに現れる事件の進展の奇っ怪さに、当のお崎は唯眼ただを睜みはるばかりです。

「お崎さん、お前は小さい時長崎に居た覚えはないか」

「お崎は悲しく頭こうべを振りました。よしんば長崎に居たことがあるにしても、それはお崎が三歳の時でなければならぬのです。」

「眼の療治をした覚えがあるだろう」

「え、それなら夢のように覚えて居ります。毎日お医者へ通うのが厭で、さんざん泣いたことを——」

「よしよし、それ丈だけで沢山だ」

「すると親分？」

お崎の眼は疑惑と不安に動きます。

「驚いてはいけぬよ、お前は川越屋音次郎の娘ではない。今から十七年前、音次郎かどわかに誘拐されて長崎へ行った、あの百松の娘のお染だよ」

お崎の唇の色がサツと変ったのです。

「音次郎は長崎でぬけに抜荷を扱ついでう序に、お前の眼の療治をしてやったが、あんまり可愛かったので、本当の娘にして育てる気になったのだろう。それにはお染ではいけない。長崎で生れ変ったから、お崎と名を変え、大阪、京都、江戸へと流れて来たのだろう」

「――」

大泥坊の娘でないとは解ったお崎のお染は、その次は、人殺しの娘としての自分を
見出したのです。

五

お崎とお染には、二つ位とし年齢の隔りがあるように思いますが、かどわか誘拐した日を

誕生と勘定し、子供心に教え込んで育てさえすれば、二つや三つの年齢はどうにでもなるでしょう。

お染のような綺麗な娘は、十九と言つても、十七と言つても、世間ではそのまま受け容れてくれるに何の不思議もありません。

話の辻褄つじつまはそれで合いました。お崎も自分がお染だったことに、何の疑いも挟みませんが、そう信ずる一方には、恐ろしい苛責かしゃくの笞しもとが、犇々ひしひしとお染の心をさいなむのです。

親の敵と思ひ込んでいるうちは、百松が縛られたのを、快い心持で見たり居りましたが、その百松が自分の本当の親と判ると、自分が口添くちぞえして縛らせたような気がして、もう一刻もジツとしては居られなかつたのでした。

「親分さん」

八軒町の川越屋を見捨てて、柳原の知合という家に落着いたお崎のお染は、

近間ちかまに居るのを幸い、毎日平次を訪ねて、百松にかかる疑いを解くようにと頼み込むのでした。

一方死んだ後の父親、音次郎と懇意こんいだった万両分限の佐野屋正兵衛は、いろいろ説きすすめて、自分のところへ引取って世話しようと言いますが、お染は平次夫婦の人柄ひとがらに打ち込んで、万両分限の養い娘になろうという気もなく、ひたすら平次の家に日参して、百松の許される日ばかり待つて居ります。

平次はその間にも活動を続けました。あらゆる証拠が百松を下手人しゅめとして示しているにもかかわらず、百松の純情だけを頼りに、群がる疑いを解いてやろうと思ひ定めたのです。

蓼齋りょうさいの庵室を平次が訪ねたのは、それから四五日後でした。

「ね、宗匠そうしょう、——こんなわけで、百松が可哀想でならねえ。百松が三輪の万七に縛られたのは、お前さんの口一つだったんだから、もし、百松が無実なら、

飛んだ罪をつくるわけで、もう一度、あの晩のことを考えちゃ下さるまいか」

平次の折入った顔を、蓼齋もつくづく見やります。

「なるほど、親分にそう言われると、私も寝醒ねざめがよくねえ。私の力で出来ることなら、どんなことでもしてやりたいが——」

剃そり丸めた頭の手前、蓼齋もひどく困こじ果てた様子でした。

「宗匠があの家へ出入りするようになったのは、どんな関係かかりあいで?——」

「なにね、ちよいちよい面白い道具があるから、店を覗いて見たのが始まりで」

「川越屋をまともな商人と思つたのですかい」

「いや、最初は気が付かなかつたが、近頃は由緒ゆいしよのある寺々の宝物を持って居るから、まさか泥坊とは思わないまでも、贓品けいずか買いをして居るものだと気が付いて、それから遠退くようにして居ましたよ」

「一二度は意見もして見たが、人の言うことなどを聞く男じゃなかった。——私もツイ腹が立って、そんなことをするのは仏敵ぶつてきだから、どんな罰ばちが当るかも知れない。今のうちに気を付けるがよい——位ばいのことは言つてやりましたよ」

「どうしてあつし達の耳に入れて下さらなかつたんです」

「そう言われると一言もない。仏様のために、音次郎を打ち殺す気になつたかも知れないが、訴人そにんする気は、毛頭なかつた」

蓼齋りょうさいはそう言つて、よく光る額を叩くのです。

「所で、あんな殺しようをするのは、どんな人間でしょう。大抵の人間なら、怨うらみがあつても、殺しただけで済みそうなものだが、わざわざ縄で吊上げて、仏様を下手人げしゅにんにするのはどう言うわけでしょう」

平次はそれが聞きたかつたのでしよう。

「私にも解らないが、——いずれは仏様を仏様と思わない人間のすることだろ

う。朝夕念仏の一つも称となえるものに、あんな罰当りなことが出来るわけではない」
蓼齋はそう言つて、思い出したように数珠じゆずを爪繰つまぐるのでした。

「仏様を仏様と思わない人間？」

平次はまた深々と考え込みます。

その翌る日、平次は下谷の作野屋正兵衛を訪ねて見る気になりました。一つは、お染が執念深く佐野屋の勧誘かんゆうを受けて、断り切れそうもなくなっているの
で、平次はその代理に、はっきりお染の意志を伝えて、七年越し自分を捜して
くれた父の百松と一緒に、川越の在所に帰るより外に望みのないことを言う
つもり
心算つもりだったのです。

大名の下屋敷ほどある佐野屋の豪勢な屋敷を訪ねた平次は、五六人の盛装を
凝こらした女中に、次々と案内されて、思いも寄らぬ奥の一間に通されました。

正面さんらんに燦爛として輝くのは、二間ほどの大仏壇で、その前に端座して、何や

らブツブツやって居るのは、主人の正兵衛でした。やや暫く待つて居ると、
勤行を終った正兵衛は、水晶の念珠ねんじゆを袂たもとに納めて、静かに此方へ向き直りまし
た。

「銭形の親分、飛んだお待たせしました」

「いえ、どう致しまして、あつしこそ飛んだ邪魔で——」

「朝夕二度のお経を上げないと、どうも私は気が済まないのな。——ところ
で、御用は？ 親分」

まだ四十そこそこでしょう。蒼白くて品の良い正兵衛は、女中共に何やら言
い付けながら、思い出したように、こう言うのでした。

「何でもありません。——あの晩、川越屋へ旦那がいらしたのは、ありや
何刻なんどきでした」

「えッ」

平次の言葉は自信に満ちております。相手は諸大名の御金用達、苗字帯刀も許されている佐野正兵衛ですから、岡っ引の平次は対等の口をきけるわけもなかったのですが、相手の調子に少しの躊躇ちゅうちよがあると、職業的な平次の攻撃がヒタヒタとその弱点に付け入るのです。

「旦那、隠しちゃいけません。あの死骸を吊った縄の結び目は、羽織や足袋たびの紐より外に、物を結んだことのない人間の仕業だし、床に転がった仏像の下に、何があったと思います」

「――」

正兵衛はサツと蒼くなると、しきりに自分の腰のあたりを捜さがし始めました。

「佐野屋さん、外には子分が二三十人、手ぐすね引いてあつしの合図を待っていますよ。踏ふみこ込んで家捜しすれば、川越屋の音次郎が、諸方の寺々から盗み出した、宝物の三つや四つは、この屋敷から出る筈。免のがれっこはありませんよ、

旦那

「川越屋を殺したのは、わけのあることでしよう。それを聞こうじゃありませんか」

「仏像を下手人にした手際は、並大抵の人間に出来ることじゃない。仏像を仏像とも思わない人間というと、手近なところお前さんより外にはないはずだ。

お釈迦しゃかも観音様かんのんさまも、お前さんが見れば、何百両、何千両の金と見える。ね、そうじゃありませんか。大仏壇の前へ客を通して、出鱈目でたらめの経きょうを読むのを見て、私はすっかり謎が解けたような気がしますよ」

平次は一気にまくし立てました。

「恐れ入った、親分、私が悪かった。——いかにも、音次郎を仏像に吊ったの

はこの私に相違ない。が、音次郎を殺したのは私じゃない」

「——」
佐野屋は畳の上に両手を突きながら最後の抗弁をつづけけます。

「あの晩、音次郎に呼出されて行った。——今まで三四度、盗んだ物と知りながら、品に惚れてツイ買い取ったのを、音次郎の強請の種にされ、恐ろしく高いものを、次から次と買わされたのだ。——今度はあの三十貫余りの仏像、明日にも五百両で引取ってくれという難題だ。あんまり馬鹿馬鹿しいから断ると、目安箱へ一本抛り込んで、佐野屋の家捜しをさせる。臓品が五つでも六つでも出て来たら、この私は御処刑、家は闕所に決って居る。その時は川越屋も無事では済むまいと言うと、川越屋などは身上も気も軽いから、訴え出る日は江戸をずらかる日だ——とこう言うのだ」

「仕方がないから言いなり放題になる心算で、あの晩も出向いて行くと、驚いたことに当の音次郎は長火鉢の前で縊り殺されているのだ。一時は驚いて逃げ帰ろうと思ったが、日頃の怨がムラムラと湧いて、何としても癩にさわつてたまらない。あの仏像を明日は此処へ運ばせる心算で、店に用意してあつた縄を外し、床ゆかの上の仏像から居間の長押ながしの上を通して、死骸を吊り上げてやったに違いない。——あとで、あんな無法なことをしなきゃよかつたと思つたが、その時は、あんまり腹が立つて、仏像でも背負しょつて、地獄へでも行きやがれと思つてしたことだ。親分、これは嘘も駈引もない話だ。どうぞ、穩便にして下さい。この通り、——佐野屋の身代を、半分差上げてもいい、お願いだ」

正兵衛は本当に、畳に面形めんがたを押さぬばかりにかき口説くのです。

「そんな気障きざなことを言うとは、穩便にするどころか、思い切り荒立てたくなる

よ。本当に悪かったと思つたら、信心でもない仏様いじりなんか止して、少しは貧乏人にでも恵めぐんでやんなさい。——ところで、そうすると本当の下手人は誰ということになるだろう」

平次もここまで来ると、ハタと行詰りました。佐野屋正兵衛は贅沢ぜいさくが嵩こじた性格の破産者には違いありませんが、言うことは嘘らしくもありません。

「親分、万一の場合、私が疑われては叶かなわないから、音次郎の頸くちに巻いた古手拭ぬぐいを、あの店にある大きな瓶かめの中へ抛ほうり込んで来ましたよ。それが何かの証拠しやうこになりやしませんか」

「——」

平次の頭の中には新しい光明がパツと射しました。

六

川越屋に取って返して、店の瓶かめの中を見ると、佐野屋が言った通り、煮にしべたような手拭が一筋、少しばかり血のにじんだのが出て来ました。

その足で笠森かさもりいなり稻荷側の安宿に取って返すと、

「親分さん、巡礼の爺じいさんが、帰って来ましたよ。飛んだお骨折で」

主人あるじがそんなことを言っていて迎えるのです。顎あごを一つしゃくって通して貰うと、狭い汚い部屋の隅っこに、一塊かいの檻ぼろ褌をつくねたように、百松は縮ちぢこまって居るのでした。

「有難うございました、親分さん、お蔭様で許されて参りました。——銭形の親分さんのお口添えがありましたそうで、その上娘の行方まで判って、こんな嬉しいことはございません」

百松はそう言いつづけながら、フト挙げた眼が、銭形平次の持って居る古手ふるてぬ

拭ぐいに止まったのです。

「爺さん、この手拭を知って居るだろうな」

百松の渋紙色の顔はサツと血の気がうせます。

「皆んな申上げた方がいいよ」

「ハイ、申します、皆んな申上げます。——その代り、娘がもうここへ来る筈になって居ります。せめて十七年目で親子名乗おやこのすむまで、縛ることだけは勘弁して下さい」

「あの晩、私は音次郎の家へ行きました。あのお崎という娘が、私の娘のお染に違いないと、私は心の中できめて居たのでございます」

「年が違つても、眼が二つとも黒々としていても、自分の娘を何時までも知らずにおる筈はございません。両国から帰るとすぐ、川越屋へ行つて、娘を返せと強談ごうだんすると、——あの音次郎の奴が、いかにも、お崎はお前の娘のお染に相違ないが、いつかはお前に覚さとられるだろうと思つて、遠方へ、二度とここへ帰られない遠方へやつてしまった——とこう言うじゃございませんか」

「——」
平次は黙つてその先を促うながしました。

「あさつての方を向いて、煙草を輪に吹く姿の憎々しさ。ツイ、かつとなつて、後ろから頸筋へ手拭を巻いてしまひました。——あとは無我夢中、氣の付いた時は、ここへ歸つて来て瘡おこりのように顫ふるえて居りました」

「——」
「親分さん、私はたしかに音次郎を殺しました。すぐにも名乗つて出る心算つもりで

したが、親分と一緒に川越屋へ行つて、お染の無事な顔を見た時、すっかり考
えが變つてしまいました。せめて、十七年目で、父娘おやこの名乗合いをするまで、
隠せるものなら隠しおおせようと、こう思い定めたのでございます」

「――」

老巡礼の百松は、平次の裾すかに縋りついて、無い齒を噛みしめながらむせび泣
くのです。

「今晚、柳原から娘が来る筈になつております。たった一晩、名残を惜しませ
て下さい。親分さん。――あれ、そう言ううちにも、誰か、門口へ来た様子――」
神経の極度に立っている百松は、門口あしおとの躑足を聴き付けて、もうフラフラと
立ち上がるのでした。

廊下を踏むふ女の躑足。

「父さん」

破れた唐紙からかみは外から開いて、パツと飛込んで来たのは匂うばかりのお染、一塊の花束のように、ヨロヨロと立ち上がった百松の諸腕もろうでの中へその身体を投げかけたのです。

「お染」

「父さん」

激情の情景シーンを背後に、銭形平次はそつと部屋の外に滑り出しました。

「親分」

お染を送って来たガラツ八の長ンがい顔が、其処いよにあったのです。

「八、帰ろう」

「下手人の当りは？ 親分」

「縛られた仏様に訊くがいい。俺はもう岡っ引いゃは厭だ。明日は八丁堀へ行つて、十手捕縄を返上するよ」

「又いつものが始まったぜ」

平次の後を追って、ガラッ八も外へ飛出しました。襟もとがゾクゾクする二
月の谷中道、やなかみち涙に濡れた平次の頬を、梅の匂いが、ほのかに吹いて過ぎます。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵—萩 柚月

初出—「オール讀物」昭和十四年一月号 文藝春秋社

底本—「錢形平次捕物全集」第四卷 河出書房 昭和三十一年六月三十日初版

編集・発行
銭形倶楽部

お染の嘆き



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>